

一人で行くよりも二人のほうがこの人生は楽しい  
 だろう……ニューオーリンズまで3000キロ！  
 もう淋しくはない お前と俺とあいつ——

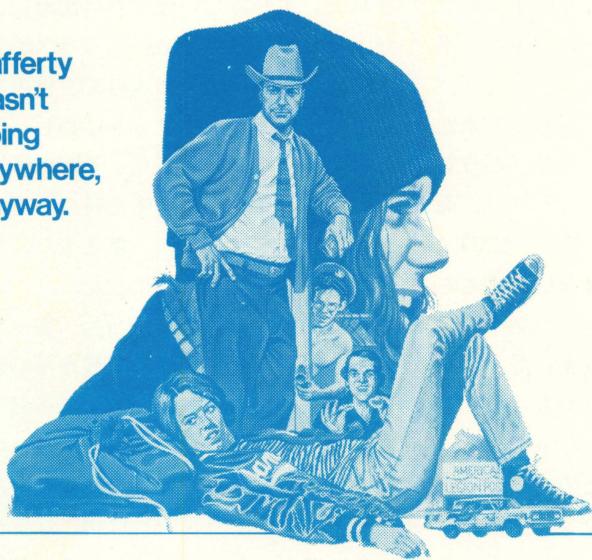
テクニカラー/パナビジョン  
 ワーナー・ブラザーズ映画

From Warner Bros.  A Warner Communications Company

# ブルージーンズ ジャーニー

## Rafferty and the Gold Dust Twins

Rafferty  
 wasn't  
 going  
 anywhere,  
 anyway.



A Gruskoff/Venture/Linson Production

Alan Arkin/Sally Kellerman/Mackenzie Phillips

Rafferty and the Gold Dust Twins

Produced by Michael Gruskoff and Art Linson  
 Written by John Kaye. Directed by Dick Richards. Panavision® Technicolor®  
 From Warner Bros.  A Warner Communications Company

### ■キャスト■

ラファティ……………アランアーキン  
 マック……………サリー・ケラーマン  
 フリスビー……………マッケンジー・フィリ・ブス  
 ビニー……………アレックス・ロッコ  
 アラン・ブーン……………チャーリー・マーチン・スミス  
 ビリー・ウィンストン……………ハリー・ディーン・スタントン  
 ジョン・ビーチウッド……………ジョン・マクリアム  
 ザ・ジーザス・フリーク……………リチャード・ヘイル  
 ルイス・プリマ……………ルイス・プリマ  
 サム・バテラ……………サム・バテラ  
 証人達……………証人達

### ■スタッフ■

製作=マイケル・グラスコフ&アート・リンソン/監督=ディック・リチャーズ/脚本=ジョン・ケイ/撮影監督=ラルフ・ウールジーA.S.C./編集=ウォルター・トンブソン/音楽=アーティ・バトラー/共同製作=ジェリー・ブラックハイマー/美術監督=ジョエル・シラー/ユニット・プロダクション・マネージャー=クラーク・L・ペイロウ/第1助監督=チャールズ・マイヤーズ/装置=ドンフェルド/台本監修=レイ・クイロズ/特殊効果=ポール・ポラード/衣装=ロン・ドウソン/メーキャップ=レオ・ロティト/スタント調整=バディ・ジョー・ホッカー

## 全米のマスコミが絶賛！《名作の秋》にワーナーが贈ります！

- \* 優しくて…おかしくて…心にしみる必見の名作！  
 ——ニューヨーク・デイリー・ニュース
- \* 全篇これ笑いの連続！  
 ——ニューヨーク・タイムズ
- \* 悲しみを乗り越えたおかしさが胸に迫る——ニューヨーク・ポスト
- \* アーキンは偉大だ！素晴らしい——見事に完璧な演技だ！優しく暖かくそして面白い！  
 ——ニューハウス・ニュースペーパー
- \* 知らず知らずのうちにあなたの心にとけこんでいく映画！その素晴らしいさに気づいたとき、あなたはウットリと満足しています。

- 本当にいい映画とはこれです！  
 ——ザ・ニューヨーカー
- \* 絶対に気に入る！あなたの人生に衝撃を与える映画です  
 ——ニューヨーク・マガジン
- \* 胸を打つ、しかもしっかりとしたおかしな映画！ケラーマンは官能的であいきょうがあり、若いフィリップスは魅惑的だ！  
 ——コスモポリタン
- \* 思いがけない喜びと可愛らしい楽しさでいっぱい傑作！  
 ——プレイボーイ

### \*かいせつ

人は皆、淋しさに耐え、心寄せ合える喜びを期待して、それぞれの人生を生きる。孤独な人生の中でフと知りあった見知らぬ同志が、お互いの優しさに満たされた時、そこに愛が生まれる。

ここには「イージー・ライダー」の自由な心と「アメリカン・グラフィティ」の純粹な若さと「スケアクロウ」の限らない優しさがある。そして素晴らしい希望と心暖る笑いがある。

デビュー作「男の出発」の鮮烈な映像感

覚で一躍その手腕を認められた俊英ディック・リチャーズが、写真家出身の監督らしいリアリズムと新鮮な詩情をこめて描き上げたヒューマン・コメディの大傑作。

主演は「フリービーとビーン 大乱戦」でトボケた味を見せた名優アラン・アーキンと、「マッシュ」のサリー・ケラーマン、それに「アメリカン・グラフィティ」でおマセな女の子を演じて一躍注目を集めたマッケンジー・フィリップスが、笑わせて笑わせてグッと泣かせる名演技を見せている。他にも「フリービーとビーン…」の

アレックス・ロッコ、「アメリカン・グラフィティ」のチャーリー・マーチン・スミスなどの個性派がガッチリと脇を固めている。

ロサンゼルスからニューオーリンズまで、おかしな3人のおかしな旅を詩情あふれる景観の中にとらえた撮影のラルフ・ウールジーは、リチャーズ監督とは「男の出発」以来の名コンビ。脚本はジョン・ケイが担当している。また全篇を通しておなじみのカントリー・ウェスタンが見事な効果で心にしみる。

(上映時間・1時間31分)

## \*ストーリー

高校を出てすぐ海兵隊に入隊し、20年もの軍隊生活を務めあげたガニー・ラファティ(アラン・アーキン)は、今はカリフォルニア州の運転免許検定官として退屈な毎日を過していた。そんな彼が、いつものようにグリフィス公園でランチタイムをのんびりと、酒を飲んですごしていた時、フと知り合ったフリスビー(マッケンジー・フィリップス)と“ビッグ・マック”(サリー・ケラーマン)という2人の娘は、いかにも世の中からはじき出された不良娘といった風体だが、何故か憎めぬ女の子だった。ビッグ・マックは歌手志望、フリスビーは作家志望で、自分たちの“イカれた旅行”を現在執筆中だという。ラファティは会社に戻る途中、2人をハリウッドまで送ってやることにした。3人は、12年間乗り続けて今では4ドアのうち後のドア1つしかあかないというラファティの、ご立派としか言えないようなオンボロ車に乗り込んだ。

ところが途中、フリスビーが後からラファティに拳銃をつきつけた。行先変更である。ニューオーリンズへ行けと言うのだ。冗談じゃない。ロスからニューオーリンズまではザッとみても2600キロもある。それにラファティには仕事もある。日頃から意欲のない彼の仕事ぶりでは、無断欠勤でもしようものなら即クビである。金だってあまり持っていない。それは彼女たちも同じようである。頭に来たラファティは、途中ガソリン・スタンドでフリスビーがトイレに行ったスキについて、マックをつき落とすと、エンジンをフカして逃げ出した。

ラファティは車に残された彼女たちの荷物を、怒りにまかせて叩きつけてはみたものの、何か心にひっかかるものがあった。荷物の中に“空包”とかかれた弾丸の箱を見つけてからはなおさらであった。

一方、ラファティに置き去りにされたフリスビーとマックは、拳銃を見て逆上した店の主人とあわや殺し合いになりそうな雰囲気のところを、通りがかった移動教会の



車に逃げこんで難をのがれた。だが、フリスビーは牧師の説教をクドクドと聞きながら車に乗ってられるような女の子ではない。案の状、牧師と口論のあげく車から飛び出した。

ちょうどそこにラファティがやって来た。気になって2人を捜していたのだ。どうせ、これから戻っても会社はクビだろうし、面白いこともない。それならいっそ、このイカれた娘たちとの旅も悪くはないと考えたのだった。ラファティは先づ、ラスベガスへ寄って旅の資金づくりを提案した。

途中、ラファティとマックが愛し合うようになり、取り残されたような気になって機嫌の悪いフリスビーをなだめすかして連れていったラスベガス。資金づくりはバッチリ。まづラファティは文字通りのポーカー・フェイスと口で相手をまどわせ連戦連勝。一方、娘たちの方は元手もなにもなし。よく出ているスロットマシンをしている男に一人が話しかけ、そのスキにもう一人がたまっているコインをソックリくすねてくるというポロ儲け法。そんな3人の所へビーニー(アレックス・ロッコ)というおかしな男が近づいてきた。この男も変り者という点では3人に負けない。ベガスの町を案内すると先頭に立ってレストランへ入ったのはいいが、食べ終ると3人に“何くわぬ顔で外へ出ろ”と小声でささやき、一人残ると、全然しらない男の所へ近寄り、親し気に話しかけながら、そのテーブルクロ

スに火をつける仕末。他の客が大あわてで、それぞれ料金をおいて外へ飛び出すのにまぎれて、男も涼しい顔で外へ出る。ところが、それを窓から見ていたフリスビーとマックは、もう一度店に入って、他の客が置いていったお金をポケットにねじ込んでくるというズズウしさだ。そんなゆかいな男とも、酒をくすねて来た時に、車のドアをまちがえたばかりに、置き去りにせざるを得ず、3人はまた旅に出た。

次はマックの故郷ツーソンへ寄って、レストランを経営している父親からお金を借り、それからニューオーリンズへ向うことにした。ガソリンをごまかしたり、壊れてしまった車の部品を、新車同様の車から盗んで来て直したり、一行は何かツーソンに着いたが、マックの家もおちぶれていて、とてもお金を借りられるような状態ではなかった。それどころか、かつてに家出したマックは、父親に改めて勘当を言い度されてしまった。フリスビーもラファティの欲しがっていた帽子を買うために、ホテルに誘い込んでカモった若い兵隊(チャーリー・マーチン・スミス)に訴えられ、逮捕されてしまった。送られる先は彼女の故郷“ニューオーリンズ孤児院”だった。ラファティは必ず迎えに行くとフリスビーに約束した。旅のあいだに彼女の本当に純真な心を知って、ラファティは優しくして淋しがり屋のフリスビーに、父親にも似た気持を抱いていたのだった。マックも歌手になれと勧めるバンド・リーダーと会い、彼と一緒に行くことにした。ラファティは、もうすぐ年金がもらえるから、3人で一緒に暮そうと言うが、マックは淋しげに微笑んで“待っていて”と言うのだった。

——数週間後、ニューオーリンズ孤児院に、見なれたオンボロ車があった。ラファティがフリスビーを養女として引き取りに来たのだ。新しい仕事が見つかったという。明るい笑顔が、いつまでも2人の頬から消えなかった。

